
ゴッド・リベンジ 《序章 ～取り戻せ、全てを～》

ダンテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッド・リベンジ 《序章 〱 取り戻せ、全てを〱》

【Nコード】

N2944Z

【作者名】

ダンテ

【あらすじ】

「俺は、一体誰で。何の為に生まれて、何の為に生きて…此処に居るんだろうな」

ゴルド。それは今から数年前。孤独に晒され、彼は全ての悲劇を見てきた。愛する家族を喪つてから。自分を投げ出し、現実から目を背けて生きる事を決めてから。

時は流れ、成長した少年。生ける屍として生きる覚悟を決めていた

ゴルドは、太陽のような少女と出逢う。ルビィ。記憶を無くしつつも前へと進んで行くその強さは徐々にゴルドの覚悟を揺るがして行く。

そして、変わり果てた目の前の者を見て、彼らは何を決意するのか。

惨酷で脆く、美しい、これはもう一つの物語。その序章。

【これはポケットモンスターの二次創作です。】

はじめに（前書き）

プロットを考えた末、投稿しました。

呼んで頂ける心の広い方、まずは注意書きです。

はじめに

この作品は、ポケットモンスターの二次創作になります。

公式とは一切関係がありません。

また、以下の点が含まれます。

- ・ 闇堕ち要素、死ネタ要素あり。
- ・ 残酷な生体実験描写、暴力描写あり。
- ・ 間接的に性的暴力や虐待を示唆する表現があります。
- ・ 悲惨な目に遭うキャラが後を絶たず。
- ・ 『鋼の錬金術師』のパロ要素あり
- ・ 『ポケットモンスター ファイアレッド・リーフグリーン・ルビー・サファイア・エメラルド・ダイヤモンド・パール・プラチナ・ハートゴールド・ソウルシルバー・ブラック・ホワイト』のいずれかからゲストキャラ出演予定。

・ 基本的に不定期更新。

一応一般向けとして執筆しております。

基本友情重視ですが、恋愛描写は若干あります。

また基本的にダーク。

ものすごくダーク。

序章中盤までは多分安全ですが、序章終盤からの展開が真っ暗です。

ぶっちゃけ、キャラから死人が出ます。

それでも大丈夫な方のみ、どうぞ。

長い長い物語になりますがお付き合いいただければ幸いです。

はじめに（後書き）

次回から始まります。

【010：追憶はただ、美しく】（前書き）

前の注意書きからかなり間が空き、申し訳ありません（汗）。

この部分はプロローグに当たります。

この部分だけでは何が何だか分からないかもしれませんが話が進むにつれ、分かるようになるかもしれません。若干不安（汗）

それでもよろしい心の広い方、どうぞ。

【000：追憶はただ、美しく】

あたしはあいつに二度、会った事がある。

一回目の時、あいつ等の姓はまだ、“フィオーリ”じゃなかった。

母親が重い病気で、病院に通うようになってから少しした位……だと思っ

自慢してる訳じゃないけど、あたしの家は大きい。

お金に不自由した事なんかないし、父さんと母さんも優しく接してくれた。

何を思ってたか、自分が経営してる診療所にまだ子供だった（今もまだ子供だけど）あたしを連れて行った。

金色がかった毛並みの奴と、銀色がかった毛並みのピチュー兄弟がいつも外来の待合室に居た。

後で聞いた話だが、兄弟のうち弟は母親が病気で精神的に参っていて兄に連れられて薬をとりに来ていたらしい。

弟は昔いじめられっ子だった。

それは一緒に遊ぶようになってから、兄の方から聞いた情報だけだ。

あの時感じた違和感が分かる気がする。

弟は兄に依存しきっていた。

常に常に、兄に守られなければ、庇われなきゃ自分の足でも立てないような子供だったんだろう。

あいつ等はその当時から歪んでいた。

弟にとって兄は世界の全てで、兄にとって弟は命より大切なものだった。

小さい頃に母親が大病を患って亡くなったせいなのは分かる。

それにしてもあの関係はマズかったハズだ。

本人達も薄々気付いていたかもしれない。

でも。

彼らの愛は“兄弟の愛”じゃなかった。

たった一つの違いなのに、“親子の愛”に断然近かった。

それが異常と言わずに何と言っただろうか。

『本読むの、好きなの？』

そんな二人の中に――あたしは割り込んで行った。

たまたま親の診療所に来た娘さん、いやはや図々しいたらない。

でも、あたしは昔からこんな性格だから。

良くも悪くも、他人の領域に踏み込むのに躊躇なんかしない性格だった。

あいつらはガチガチに緊張していた。

というより警戒、だった。

本人はもう覚えちゃいないだろうけど、お前も虐めるのかって目で兄は私を見てた。

まあ、すぐ打ち解けて遊ぶようになったんだけどね。

それから3年位遊ぶようになってたけど、二人はいつも本ばかり読んでいた。

来る度来る度本は変わったけれど、本のジャンルは共通していた。

『これは『神技』っていつて、頭のいい人のお勉強なんだって!』

『神技』。

この世界における学問の一つだ。

詳しくは知らないけれど。

旧式の技の威力を遥かに上回る技を発動できる高度な科学技術。

旧式の技を遥かに上回るその技術は色々な事に使われた。

医療技術は格段に進歩し、その他にも採掘技術や発電技術にも貢献し、娯楽として神技と旧式の技を駆使してバトルを行う『エレメンタルバトル』も作られた。

だが、良い事ばかりではなかった。

血塗られた歴史と謳われた『ヴァルドラ事変』でそれが使われたのだ。

ヴァルドラの人々は焰に身を焼かれ、弾丸に貫かれて多くの者が命を落とした。

神技使いでもあった父親の影響か、彼らは神技にのめり込んでいた。

だが、彼らが神技を学ぶ理由はそれだけではなかった。

兄弟の母親は彼らが丁度四歳の頃に病気で亡くなっている。

一口で言ってしまうえばそれだけだが、兄弟を苦しめていたのはそれではなかった。

母親である彼女は自分の病気を自覚していながらも医者にかかる事も無く数年間は隠し続けていたのだ。

病名『気管支原性癌』。

平たく言うと気管、気管支、細気管支あるいは末梢肺由来の癌。

診察を受けていた時にも吐血していたのも覚えている。

その人がウチの診療所で診てもらった時には既に取り返しのつかない状態になっており、気管全部に癌細胞が広がっており、既に右肺の下葉部と中葉部にまで浸潤していた。

享年32歳、彼女は緩慢な自殺のようにして亡くなった。

自分達のせいだ。

自分達がもっと早く気付いていれば、母を助けられた。

それが彼らの心に深く突き刺さっていたのだろう。

彼らは信じていたのかもしれない。

『神技』さえあれば、愛する者を守れると。

亡くした人さえ帰ってくると。

それが同様に突き刺さっていたのは彼らだけでなかった。

彼らの、父親もだった。

よく覚えていないが、彼らの父親はとても、優しい人だった。

しかし、妻が病死してからの落胆ぶりは凄まじく、遺体を見た時には号泣していた。

妻が病死してからというもの、彼は遠い目をしている事が多く、

視線の先にはハクロの青い空があった。

それでも彼が息子達に対する愛情を持ち、いつも通り接していたのが唯一の救いだった。

神技使いでもあった彼は兄弟が神技使いとしての才能の片鱗を見せた時は凄く喜んでいた。

当然兄弟達も父親に褒められることに母親を亡くした苦しみからどんどん立ち直っていった。

兄弟は、彼らは幸せを取り戻していった。

しかし、それは無慈悲にも唐突に、ショッキングな報せによって引き裂かれた。

『父親と弟が死んだって……？』

きつと父さんには分からなかっただろうな。

あの兄弟の間にどんな聖域が張り巡らされていたかなんて。

あの、親子のように依存し合っていた兄弟を引き離す？

運命はなんて残酷な事をするのだろう。

あたしはあいつに再会した。

彼は変わり果ててしまっていた。

黒い瞳。

ああ、見ているだけで見入ってしまいそう。

しかし。

その瞳には根深い悲しみと、自分への強い嫌悪があった。

『久しぶり。…女だったんだな、お前』

開口一番それかい。

あたしは苦笑いした。

随分時間は経った筈だけど、あいつは相変わらずチビのまんまだっ
た。

あの頃はもっと小さかった弟が居たからかもしれない。

でも。

僅かに捲れたシャツの下は、傷だらけで。

もう痛みは残っていないのだろうけれど、背中には沢山の傷があっ
た。

『何があったのよ』

彼は、怪我しただけだと言った。

だけど、あたしもそれで騙されるほどバカじゃない。

嘘だ、と。

尋ねると、彼は弱々しく言った。

『ごめんなさい。…ごめんなさい…！』

あいつが多分ずっと心の中に閉じ込めてきて、振り切ろうと思っていた、過去。

それを、あたしだけが知った。

言わせるべきではなかった。

でも、あたしは知りたかった。

あいつが好きだったから。

淡い淡い、何処にでもあるような片思いだけど。

私にとっては一生の物で――私の大切な思いだった。

『私にできるような事なら、やっただけ。あなたは一人じゃないんだから。』

安っぽくて、無責任な言葉だった。

だけど、あたしは決めたのだ。

また、彼が笑ってくれるようになるまで頑張ると。

なのに、さ。

どうしてこうなっちゃうんだろ。

護りたい。

助けたい。

そう誓ったのに - - あたしは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2944z/>

ゴッド・リベンジ 《序章 ～取り戻せ、全てを～》

2011年12月27日22時54分発行